

第30回岐阜大学獣医臨床セミナー 教育講演

期日：2014年2月16日（日） 15：00～18：00

場所：岐阜大学大学院連合獣医学研究科 6階合同ゼミナール室

<http://www.animalhospital.gifu-u.ac.jp/>

トイ・プードルに発生した 肝内シャント

鷲巣 誠

岐阜大学動物病院外科

はじめに

門脈がさまざまな短絡血管を経由して大静脈に短絡する門脈体循環シャント（portosystemic shunt；PSS）の診断・治療は、現在多くの動物病院で実施されるようになってきた。PSSは、静脈管遺残に関連する肝内シャント（肝内PSS）と、肝臓外に存在する肝外シャント（肝外PSS）に大別される。一般的に肝内PSSは大型犬に、肝外PSSは小型犬に多く発生するといわれている。

著者が経験した1999～2011年におけるPSS症例339頭において、肝内PSS症例の割合は4%で、肝外PSS症例の割合は89%であった。また、2011～2013年のPSS症例35頭における肝内PSS症例の割合は18%、肝外PSS症例の割合は73%、残り3頭はマルチプルシャントであり、最近では肝内PSS症例の割合が増加してきている。著者が2011年までに日本獣医生命科学大学および岐阜大学で診療したPSSの好発犬種（n = 339）は、ヨークシャー・テリア（19%）、ミニチュア・ダックスフンド（11%）、トイ・プードル（9%）、パピヨン（9%）、Mix犬（9%）、マルチーズ（8%）であり、これらの犬種で全体の65%を占めていた。2011～2013年に岐阜大学で診療したPSSの好発犬種（n = 35）は、トイ・プードル（26%）、シー・ズー（11%）、マルチーズ（11%）、ミニチュア・シュнауザー（8%）、イタリアン・グレーハウンド（6%）であり、これらの犬種で全体の62%を占めていた。2011年までの症例では、肝内PSS症例のほとん



図1 肝内PSSに罹患したトイ・プードル
著者が経験した、ここ3年間の肝内PSS症例では、レッドあるいはブラウンといわれる毛色のトイ・プードルがほとんどであった。

どは大型犬であったが、2011～2013年での肝内PSS症例はすべて小型犬であり、そのほとんどはレッドあるいはブラウンといわれる毛色のトイ・プードルで発生していた（図1）。

PSSは遺伝性疾患であり、米国ではヨークシャー・テリアでのPSSの発症率が他犬種に比べて格段に高いこと